

藤壺における「おほかた」考

山崎, 和子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2005-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010067>

藤壺における「おほかた」考

はじめに

源氏物語において光源氏から藤壺への思慕は縷々語られるのに対し、藤壺から源氏への愛情が語られることは少ない。そのため、藤壺に源氏への愛情を極力読み取らない解釈もある。その頭の桐壺巻においても「御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ」(①)を、源氏の一方的愛情表現であるとするものと、「藤壺の弾く琴の音に源氏が笛を吹き合せてお聞かせする意」として「藤壺のほうからも心動く」(『新全集』)ことを読み取る、二つの解釈がある。「通ふ」の語からは、一方向のみの働きかけを表すとは考え難く、源氏の笛の音に対し、藤壺の琴の音の通い合いがあったことを表現していると思う。しかしこのように、藤壺の源氏に対する心情表現の希薄な点について、清水好子氏は、

山崎 和子

…藤壺の宮を「おんな」とも「おんなぎみ」もしくは「おんなみや」とも呼ばなかったのは、源氏にとつて、彼女は理想の恋人だったからである。その身分も、天帝の妃であり、源氏の手の届かぬところに眩しく輝く。彼のまわりをとりまく幾多の女性と同然にされてはならないし、思慕の心は絶対にあらわにしておはならなかった。

と述べ、伊藤博氏も「皇妃・皇子の母としての立場からの意志的な自己抑制」があったと指摘している。

ここでは紅葉賀・花宴・賢木巻に見られる三例の藤壺に関する「おほかた」の表現を精確に読むことによって、藤壺の源氏に対する愛情の有り様を探り、「おほかた」によって意図された表現性を探ってみたいと思う。

一 源氏物語の「おほかた」の語義について

従来「おほかた」の語義は、『若波古語辞典』（一九七四年）では「大体のところ、特別な事情・関係などのないこと、普通・ひと通り、世間一般」などと捉え、『新選古語辞典』（一九七三年小学館）でも副詞の項において「特殊なものを除いて、全般についてという意」と把握されている。まず源氏物語における「おほかた」の語義を精確に把握しておきたい。「おほかた」40例、「おほかたの」113例、「おほかたも」4例、「おほかたは」3例、「おほかたに」34例、全194例は用法上名詞と副詞に分類される。

- 1 一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。(桐壺①188-193)
- 2 六条院にも、おほかたにつけてだに、世にめやすき人のなくなるをば惜しみたまふ御心に、まして、これは、朝夕に親しく参り馴れつつ人よりも御心とどめ思したりしかば…(横笛④345)
- 3 …我もおほかたには親めきしかど、憎き心の添はぬにもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなして過ぐし…(若葉下④260-261)
- 4 年ごろ、下の心こそねむごろに深くもなかりしか、おほ

かたには、いとあらまほしくもてなしかしづききこえて…(柏木④318)

例1は、桐壺帝の第一皇子に対する並一通りの愛し方で大切にしている「おほかたのやむごとなき御思ひ」と、源氏への個人的な「私物」に思ほしかしづくことを、対比的に述べている。2は、「だに」と「まして」の呼応によって、普通・一般の關係にある人でさえという指標となる基準を示すことによって、まして親しい間柄である柏木を対置する。3では、源氏の玉鬘に対する「おほかたには親めきし」表面的態度と、「憎き心の添はぬにもあらざりし」本音の恋心が対比され、4でも、柏木の落葉宮に対する「ねむごろに深くもなかりし」本心の「下の心」と、「いとあらまほしくもてなしかしづききこえ」ていた「おほかた」の全般的な表向き態度とが対比されている。これらの例から明らかのように、名詞「おほかた」は、一般的・全体的・表面的・公的な認識であることを表し、その一方で「おほかた」に対比される、私的・内心・本心・個別・特別など固有の認識が挙げられている。

- 5 しばしは人々求めて泣きなどしたまひしかど、おほかた心やすくをかしき心ざまなれば、上にいとよくつき睦びきこえたまへれば…(薄雲②435)

一方右例は、明石の姫君が総体的に素直で明るく可愛い性質である故に、紫の上になつき親しむという、全体的に・総体的に・おおよそ・一般になどの意を表す副詞の用法であるが、ここでは検討の対象外とした。

ところで、『古今和歌集』の「おほかた」全5例について考

察された工藤重矩氏は、「会话性を持つ和歌の表現技法上の一つの特徴」として、次のように捉えている。

「おほかた」という時、常に言外に「個・特殊」の概念が対概念として含められているのであって、作者の真意はむしろ言外の「個」の方に存するのである。

これは富士谷成章が「かざし抄」で説いた「肝要のものを心にもちて、其外をさす詞」という把握と同じ認識であり、表現された「おほかた」の「全体・一般」ではない、言外の対概念である「個・特殊」の方に作者の「真意」があるとした。工藤氏は散文については言及しなかったが、今源氏物語例の検討において、一つには例1-4のように対比される概念が明らかに描かれているか、乃至は明確に読み取れること、二つには「真意」という点で、次のような例を考慮しなければならないと考えるのである。

6 いとく、ことなしびに、

「いづれとか分きてながめん消えかへる露も草葉の上と見ぬ世を

おほかたにこそ悲しけれ」と書いたまへり。(夕霧④446)

→447)

落葉宮の母御息所の死後、夫と落葉宮の仲に不安を隠せない雲居雁が「あはれをいかに知りてかなぐさめむあるや恋しき亡きや悲しき」と詠みかけたのに対する夕霧の返書である。夕霧が言葉で加えた「おほかたにこそ悲しけれ」は、歌の「いづれとか分きてながめん」を補足し、明確に言い定める表現である。「おほかた」に対比されるのは、「いづれと(か)分きてな

がめ」る、即ち生きている落葉宮が恋しい、或は亡くなった御息所を思い悲しいと、個別の対象に愛憐の情を抱くことである。

「真意」ということで言えば、夕霧は落葉宮に恋心を抱いており、「おほかた」ではない個別の方に真実があると見える。しかし夕霧はさりげなく、落葉宮が恋しい、御息所の死が悲しいというのではなく、人も「露」もわずかにも留まることのできないはかないこの「世」に対し、一般的・全般的な意味での悲しみを覚えると答えた。表現の「真意」ということで言えば、「おほかたにこそ悲しけれ」にある。でなければ、雲居雁をたとえ言葉の上ですら、納得させることはできない。しかし、源氏物語の「おほかた」においては、それが表現としての「真意」であるとしても、主体の「真実」であるとは単純に言い切れない、言語主体の心の揺れを含蓄する場合があることを考慮する必要がある。

二 藤壺の用例 その一

まず紅葉賀巻の例から考察していこう。

7 つとめて中将の君、「いかにご覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし

心知りきや

あなかしこ」とある御返り、目もあやなりし御さま容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、

「から人の袖ふることは遠けれど立ちぬにつけてあは

れとは見き

おほかたには」とあるを…(紅葉賀①313)

神無月の行幸の試案が行われ、源氏の青海波を舞う姿は、弘徽殿女御が「神に魅入られるのではないか」と不吉がるほどに光り輝く様であった。翌朝届けられた源氏歌は、あなたへの想いに心が乱れて立つて舞うこともできない私が、愛情を込めて袖を振りました心をわかっていただけでしたでしょうかと、青海波の袖を振る舞にことつけながらあからさまな恋情を訴えている。「袖ふる」は、『万葉集』において「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」(巻一20額田王)などと歌われるが、当該など平安朝では愛情表現と把握できよう。^(注8)一方藤壺歌の「から人の袖ふること」は、中国伝来の青海波の舞の袖を振ることと、唐の「古事」を掛けたもので、「古事」には『飛燕外伝』に見られる趙妃飛燕が太液池で舞った時、袖を上げて登仙しそうになったという故事を当てる解釈もある。源氏が「知りきや」と問いかけたので、藤壺は「唐国の古いことはよくわかりませんが」と「あなたの袖を振り舞う姿は遠かったのですが」の意を掛けて、わざとよくは分からないふうを装いながら、「立ちるにつけてあはれとは見」たと応じている。「あはれ」は共感による愛憐の情を表す語であるため、藤壺は源氏の誤解を避けるべく、「袖うちふりし心」に外見の「立ちる」を対照させ、「立ちるにつけて」と限定的に、しかも理性的に「あはれとは見き」と詠んだ。そしてその上にも付け加えたのが「おほかたには」である。「おほかたには」の「は」は、「おほかた」の認識を論理的・客観的に取り上げて、説明

をする表現^(注9)である。

今日の注釈書は「おほかたには」を次のように解している。

a 「おほかたにはあらず」の意……『全書』『大系』『全集』『新大系』『新全集』

b 「おほかたにはあはれとは見き」の意……『玉上評釈』『集成』

例を挙げるならば、a 「大方にはあらず」(並々の思いではない、の意)の略(『新大系』)、b 「その程度の」(一通りには(理解いたしました)『集成』)。既に古注でも、「詞におほけなき心のなかりせばましてたくみえましとあり。されば大かたにはあはれと見きといふ心歎」(『河海抄』)「大方にはおほしなさぬ也河海説いかゞ」(『細流抄』)「密通の方にて、あはれと見しにはあらず、たゞ公界にてあはれとは見侍しと也、にはのはもじにも、其意あり」(『源氏物語玉の小櫛』)などと説かれていた。

源氏物語中「おほかた」に下接する表現が省略された例は他になく、特異な例である。a 解釈の「おほかたにはあらず」の省略と捉えることは、藤壺は源氏への恋情を押えることができず、歌で「あはれとは見」たことへの感慨を重ねて述べたことになる。しかしそれでは、「おほかた」の事柄と対応する個別・本心など固有の事柄を対比的に語るのが常である「おほかた」の表現法則と合致しない。ここでの「おほかた」に対応する固有の概念とは、藤壺の心情を表明する「あはれ」と見たことであると思う。従って、対比されるべき二つの概念「あはれとは見き」「おほかたには」双方が藤壺の源氏への共感もしくは

藤壺における「おほかた」考

は愛憐の情を語ることはなく、「あはれとは見」た上にも更に「おほかたにはあらず（あはれと見た）」と表現されることはな
いと思われる。

一方も解釈では、『源注余滴』に引く次の『後撰和歌集』歌
を引歌として解釈する。

春雨のふらばおもひのきえもせいでいとどなげきのめを
もやすらむといふ古歌の心ばへを女にいひ遣はしたり
ければ

もえ渡る嘆きは春のさがなれば大方にこそ哀れともみれ
（巻一春中の読人知らず）

一首は詞書から、春雨が降ってもあなたへの想いを忘れるこ
とができず、むしろ春雨に若芽が萌え出るように嘆きが湧き出
てくるのだろうかという古歌の気持ちに女に伝えさせた、その
返事の歌である。男の忘れられない恋の嘆きの訴えに対し、女
はそれは「春のさが」だから「大方にこそ哀れともみれ」と男
女の贈答歌の形式に則り、一般的な愛憐の情しか感じないと切
り返している。

吉見健夫氏^{注11}は例7の藤壺歌について、『後撰和歌集』歌の下
句を引歌とすることにおいて、『あはれとは見き おほかたに
は』を倒置すればほぼ同内容であり、「おほかた」は「私的な
感情（密通に関わるような）ではなく、舞の演技に対する一般
的な感動であることをはっきりさせるために付されたものであ
ろう」と述べている。

確かに藤壺歌と文の言葉は『後撰和歌集』歌を踏まえたもの
ではあると思う。しかし藤壺は桐壺帝の皇妃として、源氏の義

理の母として立場を十分に弁えた上で、「立ちゐるにつけてあは
れとは見き」と、舞に対する愛憐の情であることを論理的・理
性的に詠んだ。そしてその上にも「おほかたには」と言葉を添
えたのは、倒置というよりも、「あはれ」が男女間の恋情を介
しての「あはれ」ではなく、普通の一般的な認識であることを、
釈明する気持ちが働いたものではなかったかと思う。順当な語
順で詠まれた「朝霧に友まどはせる鹿の音をおほかたにやはあ
はれとも聞く」（権本⑤〔5〕）歌もあり、倒置としてではなく、
歌は歌として一首詠まれた上で、尚かつ「おほかたには」と付
け加えられたと考えるのである。

木船重昭氏^{注12}も「おほかたには」を、「男女の特殊な関係を意
識して、そうではなくて普通に」の意と解し、「宮は『大方に
は』とあえて意識的に補足し警戒せねばならなかった。だがそ
のことばの慣用から、裏を返して『大方にはあらぬ』ニユアン
スを、光源氏はかぎとった」と論じている。「そのことばの慣
用から、裏を返して『大方にはあらぬ』ニユアン」と言う点
は、「おほかた」に対応する概念として、藤壺の本心である
「あはれとは見」た固有の心情が対置されるという把握と通じ
る解釈である。

しかしながら、藤壺は釈明するべく「おほかたには」と付け
加えたことよって、むしろ源氏に恋情のあることを垣間見せ
てしまうことになる。前章で夕霧の例6で見たように、言葉と
しては「おほかた」に真意を付与するのであるが、「おほかた」
の表現性が言語主体の心の内実を露呈してしまうのである。藤
壺の言葉そのものは「あはれとは見」たことが「おほかた」で

あることを明示しようとしたものである。しかるに、対応する固有の概念をクローズアップするという「おほかた」の表現性が、結果的に「あはれとは見」たことが藤壺固有の心情であると印象付けてしまうのである。

三 藤壺の用例 その二

次に花宴巻の例を見ていこう。紅葉賀巻の行幸の翌春南殿の桜の宴が開かれ、源氏の青海波の舞を思い起こした東宮の所望で、源氏は「春鶯轉」を少しく舞う。その姿を見た藤壺中宮の心情が語られる場面である。

10 中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらんもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづから思しかへされける。

おほかたに花の姿を見ましかば露も心のおかれまし
やは

御心の中なりけむこと、いかで漏りにけん。(花宴①)

355)

「わがかう思ふ」の「かう」は、直前に述べたこと、直後に述べることを受ける語である。ここでは、後の「おほかたに」の歌一首を指すと考えられる。木船重昭氏は源氏物語中「かう」が後述した内容を指す例はないことから、あくまでも前述部分から「かう」の内容を読み取るうとされたが、文の構成は次のようである。藤壺は、弘徽殿女御が一方的に源氏を憎んでいるらしいことも「あやし」と思うが、それと同じく「わがかう

う思ふ」ことについても「心憂し」と思い、意識的にその思いを「思しかへ」すのであった。そこでは源氏への愛憎を二者対比的に語り、しかしいずれをも否定的に認識している。また「御心の中なりけむこと、いかで漏りにけん」は、語り手自らが語っておきながら、自分は知らぬ顔を決め込む草子地表現である。それは歌の内容が本来語ってはならないことを語っていたからであり、一旦指示語で「かう」と語ることも、明確には語らないがための醜化の語り口ではなかつたかと思う。

歌は源氏を「花」に準え、「露」には、花に置く露と「少しも(…ない)意の副詞「つゆ」を掛ける。「花」と「露」「露」と「おく」は縁語で、花に「心のおかれ」る露には藤壺自らを仮託する。花に「心のおかれ」る我があり、それが「露も」によつて含意される。「おほかたに」見るならば「心のおかれ」ることはないだろうと事実を反する仮定を歌いながら、最後に反語によつて、到底「おほかたに」見ることはできず「心のおかれ」る現実を導き出す。反実仮定の「ましかばうまし」は、「もはやなす術のない状況における後悔や嘆き」を表す表現であり、一首は「おほかた」でありたいと願っても実現不可能なことを知りつつ仮想し、それを反語の終助詞「やは」で自らに問いかけ、否定することによつて、のつびきならない現実に対する悔恨や嘆きの心を屈折的に詠むのである。

今日の注釈書では、右歌を次のように解釈している。

『全書』……何の關係もなくて花(源氏)の姿を見るのな

ら露程の疚しさもあるまいに。

『集成』……特別ないきさつなしに、この美しい姿をみる

のであったなら、何の気兼ねもいらないうであらうに。

『新全集』……もしも世間の人並にこの花のようなお姿をみるのであったら、露ほどの気がねもなく心ゆくまで賞賛することができたであろうに

宣長は「此大かたは、源氏の君の舞を、密通の事なくて、たゞ大方の世の人にて見たらばと也、紅葉賀巻の四のひらに、大かたには、とあるところにいへるに同じ、考へ合すべし」(『源氏物語玉の小櫛』)として、紅葉賀巻と同じく、密通に対応する認識であると捉えていたが、これらの注釈書も「おほかたに」は男女関係を下敷きにした解釈をしている。

ここで「おほかたに花の姿を見ましかば」と切に仮想されることへの対応概念は、藤壺が源氏を「かう思」って見、「心のおかる」現実である。源氏との密事により子が誕生し、その罪の意識に日々思い悩むという今さらなす術もない、恐懼するべき現実である。よって「おほかたに…見る」とは、源氏との男女の關係や情愛を介することなく見ることである。

右の諸注は「心のおかる」について「やましさがある、気兼ねをする」と解釈しているが、『細流抄』では「心にかかれる」意と捉えている。

古今「露ならぬ心を花にをきそめて風吹くごとに物おもひぞつく」心は花は咲をも散をもしらずがほにてあるべきを露のごとく花の上に心を、く故によしなき物思ひのあると也。此歌にて心得べし。今源氏の姿のすぐれたるによりて心にかかれると也。大かたならましかば源のうへをさまざま

ま思ふ事もあるまじと也。

例に引く「古今和歌集」の紀貫之歌(巻二二恋歌二589)は、私は露ではないのに(露のように)花(あなた)に心をおき(執心し)始めて、噂を聞くたびに物思いをする意を詠んでいる。源氏物語においては、助詞を中に挟んだ「心のおかる」「心のみおかる」「心もおかる」「心やおく」「心をおく」を含み、「心おく」52例(「御心おく」5例を含む)が用いられている。そのうち助動詞「る」を下接する「心・おかる」が23例を占め、「心・おかる」は「心・おく」の自発乃至は受身として、自他の対応をなす。

9 ……わざと人すゑてかしづきたまふと聞きたまひしより
は、やむことなく思し定めたることにこそはと心のみお
かれて、いとど疎く恥づかしく思さるべし(紅葉賀①
322)

10 なほ北の殿をば、めざましと心おきたまへり。(玉鬘③
126)

11 ……はかなきことにて人に心おかれじと思ふも、ただひ
とつゆゑぞや」とて…(潘標②293)

12 とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞ
はかなき

かつは思し消ちてよかし。(葵②52)

例9・10では、格助詞「と」によって「心のみおかる」「心おく」内実が明示されている。9は、源氏が女を迎えたことを聞いた葵の上が、「その人を大切に思い重たく扱われるおつもりなのだろう」という内実において「心のみおかれ」て、親

しめず気が引けるのである。10は、紫の上が自分より身分が低く目下であると思っている明石の君に対し、「心外で癪に障り、失礼だ」という不快感を抱いていることを、11は、源氏が女性達から些細なことで嫉妬や恨みなどの「心おかれじ」と思うことをを表す。12は、葬の上の死後、六条御息所の弔問歌「人の世をあはれと聞くと露けきにおくるる袖を思ひこそやれ」(葬②⁹¹)に対する源氏の返歌である。先に死ぬも後に生き残るも同じ露のようなこの世に「心おき」、執着することは取るに足らないことであるとして、御息所の「思ひ」をまずはお忘れ下さいと願っている。

右例から明らかのように、「心おく」「心おかる」は、ある思いを心に留め、わだかまり、こだわることを言う。しかしそのこだわる心の内実は、心配・配慮・隔心・用心・嫌悪・気兼ね・執心・興味関心など多岐にわたる。源氏物語では直接「心おく」「心おかる」が恋情を指す例はないが、貫之歌の「露ならぬ心を花におく」は、「露が花に置く」と「心を花におく」ことを重ね合わせ、異性に心惹かれる恋情の表現となっている。藤壺歌も貫之歌を踏まえることによって、源氏に心惹かれ、想いを寄せる我を「露」に仮託したと考えることができる。吉見健夫氏は前述の論考において、藤原道長の「君をしも避くともなきにをみなへし露の心をおかれぬるかな」(公任集⁹²)が藤壺歌の下句と類似する点に触れている。道長歌も「つゆ」に「露」と「わずか」の意を掛け、「をみなへし」に「露が少しおく」ように、避けるというのではないのに、相手に少し隔て心を持たれてしまったことを詠んだものである。確かに類似の表

現はあるにしても、ここは「花」である異性に心を留め、物思いをすると詠む貫之歌の方が、異性への「もの思ひ」をすることを共通項として、より藤壺歌と照応する。

藤壺歌が「みづから思しかへされ」「いかで漏りにけん」と内省し、秘密めかして語られるものである以上、もはやそれは一般的・世間の人並みの目で見えるならば気兼ねなく賞賛できるのといった類の表現ではなく、「おほかたに花の姿を見」ることに対置された、男女の情愛を含蓄した「心のおか」る現実を読み取らなければなるまい。

鈴木宏子氏は、この歌の解釈において、

「おほかたに……見ましかば」は、へB(筆者注 紅葉賀巻例)における藤壺自身の「あはれとは見き／おほかたには」という感動を抑制しようとするこばを直接に受けて、もし本当に「おほかたに」見るのだつたらと自問したこばである。として、この一首は、「藤壺の心の底に否定しがたく存在し続けている源氏への愛執を形象化したものである。誰にも伝えることのない、独詠歌だからこそ表現可能な心情であった」と把握している。

「おほかたに花の姿を見ましかば」は、まさに紅葉賀巻において青海波を舞う源氏の姿を「おほかたには」見たと語った言葉を反芻する表現である。その時には「おほかたには」と釈明することによって隠蔽せざるをえなかった「あはれとは(は)見」た固有の心情を今は自らに問いかけ、源氏への執心を語ったものである。「かう思ふ」思いを「思しかへ」す意志的な否定の心が働き、「おほかたに」と語り、反実仮想と反語という二

重に屈折する特殊な表現性を持つことも、藤壺の源氏への恋情や、恐るべき現実への悔恨や嘆きの心が外部に漏れ出ることを極力警戒するが故のものであったと把握することができる。

四 藤壺の用例 その三

更にもう一首藤壺が「おほかた」と詠んだ歌が賢木巻にある。藤壺は御子の東宮を即位させるべく安泰を願ってきたが、桐壺院亡き後も源氏の「にくき御心」は止まず、「あさましうて近づき参」ることがあり、「戚夫人」の例も思い起こされ「世の疎ましく過ぐしがたう思」(賢木②¹²⁷)して遂に出家を決意。故院の一周忌後、主催した法華八講の最終日に出家した。そこから源氏と交わしたのが次の歌である。

13

「月のすむ雲居をかけてしたふともこのよの闇にな
ほやまどはむ

と思ひたまへらるこそ、かひなく。思立たせたまへるうらやましさは限りなう」とばかり聞こえたまひて：

「おほかたのうきにつけては厭へどもいつかこの世を背きはつべき

かつ濁りつつ」など、かたへは御使の心しらひなるべし。

(賢木②¹³³)

両歌は、藤原兼輔が子故の心の迷いを詠んだ「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰集卷一五雑一¹¹⁰²、兼輔集¹²⁷)を踏まえ、お互いに東宮を思い心乱れる、親の妄執を詠むと解されている。源氏歌は、「月のすむ

(澄む・住む)雲居」と「このよの闇」を対比し、「こ」には「この世」と「子」を掛けながら、私も出家したいと思うけれども、東宮を思うと出家することはできず、やはりこの世の煩惱に心乱れることであろうかと詠んでいる。応じる藤壺歌も「この世」と「子」を掛け、「おほかたのうき」においては出家したけれど、いつになったら本当にこの世(子)を捨て切れるのだろうか、出家した今も本心ではこの世(子)を捨て切れない嘆きの心を詠む。その未だ「この世を背きは」てではないことが「濁り」であると付け加えたのである。

注釈書では「おほかたのうきにつけては」を、「一体に、世の中がはかなく思われて」(『集成』)「おおよそ世の中のつらさから」(『新大系』¹¹⁶)「この世のおおよそのつらさゆえに」(『新全集』)と解釈し、従来の「おほかた」の把握に拠っている。しかし、第一に「おほかた」は「一体に」「おおよそ」といった副詞の用法ではなく、「うき」を修飾する連体修飾語の用法である。また「おおよそのつらさ」という現代語でも当たるまい。藤壺は、桐壺院亡き後朱雀帝・右大臣家が実権を握った今、東宮の身の安泰を図るべき方策として出家の道を選んだのであり、「おほかたのうき」はその公に関わる身の嘆きを言う。それは、前述戚夫人の例を挙げた「世の疎ましく過ぐしがたう思さるれば」(賢木②¹²⁴)、出家直後の「世のうさにたへずかくなりたまひにたれば」(同②¹³⁴)と照応する。

第一章で見たように「おほかた」には対比される固有の概念があるが、ここで対置される藤壺固有の概念とはどのようなものであるのだろうか。源氏歌の「このよの闇」は、子故の心の

闇の意も掛けるにしても、和泉式部が「願はくば暗きこの世の闇を出てあかき連のみともならばや」(和泉式部集446)とも詠んだように、極楽浄土世界と対置される、煩惱にまみれた現世と捉えることはできないであろうか。出家した悟りの世界とは対岸の濁世としての現世に当たると考えたいのである。しかも、源氏の「このよの闇」に「まじふ」嘆きの心は、藤壺の「おほかたのうき」に対比される藤壺固有の現世での「憂き」思いに繋がる。両者は、源氏が藤壺と東宮への思いを潜ませながら直情的に訴えるのに対し、藤壺は「おほかた」の語によって、逆に照射されるわが身固有の不幸観を語ろうとしている。

即ち、藤壺はこの歌でも意図して限定的・理性的に「おほかたのうきにつけては」と詠んでいる。しかしそれに対比される藤壺固有の心に秘めた苦悩から逃れることはできず、真にこの世を、子を捨て切ることができないでいると言う。「この世を背きはつ」ことのできないことが「濁り」であり、それを言葉で「かつ濁りつつ」と付け加えたのであるが、藤壺は源氏の言う「月のすむ雲居」に準えられる澄んだ悟りの境地にはなく、何といつてもまずは「濁り」の心であり、身であることを告白する。つまり「濁り」は、単に子に執着する心のみならず、現世を捨て切ることのできない、源氏と同じく「このよの闇」にまじり嘆きの心を指す。「このよの闇になほ(や)まじふ」源氏も、「いつかこの世を背きはつべき」藤壺も、「このよ」には「子」である東宮を響かせるのみならず、二人の間に密かに持続する男女の恋情に根ざしたこの世での「うき」思いが通底していたと思うのである。

木船重昭氏はこの例についても、

「おほかたのうきにつけて」には、例の「おほかたに(は)」と同様の趣が秘められている。光源氏との秘事の「うきにつけて」ではない、と否定し、彼の思慕をなお慎重に警戒し回避する。…この「おほかたのうき」の底には、現下の廃坊の危惧が、実は、重く深く沈められている。

と述べている。当該の賢木巻例でも「おほかた」によって語られる「うき」に対置される、藤壺固有の「このよの闇」にまじり「うき」思いが浮かび上がってくる。藤壺固有の「うき」思いは、源氏との男女関係によって生じた深刻な苦悩であり、運命としての不幸観であった。この例もまた明確には語れない固有の思いを語る「おほかた」の表現性を示唆するものである。

おわりに

藤壺に関する三例の「おほかた」表現の検討を通し、次のように考えることができる。まず紅葉賀巻においては、「立ちあにつけてあはれとは見き」と用心深く詠んだ上にも、更に「おほかたには」と「あはれ」の心情を一般的なものへ定位させようとした。しかし、そのことが返って本心を露呈することになるのであった。花宴巻では「おほかたに」ではあり得ない、本心としてのわが「心のおかる」源氏への情愛を密かに語ったのであるが、それは源氏には伝わることのない独詠歌として、しかも反実仮想と反語という二重に反転する表現によって、屈折的に語られる悔恨と嘆きの心であった。賢木巻では、出家し

藤壺における「おほかた」考

たにもかかわらず、「おほかた」の表向きの嘆きに対比される藤壺固有の嘆きとは、「この世」をも「子」をも真に超脱することができず、「このよの闇になほ(や)まどふ」源氏と同じく、禁忌の男女関係によって生じた嘆きの心であった。

密通・不義の子誕生による罪の意識は「そら」への恐懼として語られているが、常に明確に、一途な情熱によって語られる「おほけなき」源氏の恋情とは対照的に、賢木巻までの藤壺の源氏への恋情はあくまで抑制され、臆気にしか語られない。ところが源氏の須磨退去後には、次のように源氏への情愛が語られている。

14 御宿世のほどを思すには、いかが浅くは思されん。年ごろは、ただもの聞こえなどのつつまじさに、すこし情ある気色見せば、それにつけて人の咎め出づることもこそとのみ、ひとへに思し忍びつつ、あはれをも多う御覧じすぐし、すくすくしうもてなしたまひしを……あはれに恋しうもいかが思し出でざらむ……(須磨②121)

年来は、少しでも源氏への情愛ある様を見せると、人の非難を受けるものばかり思い、ひたすら心を抑え抑えて、多くの愛憐の情も見過ごし、そっけなく振舞ってきた。だが今は、しみじみと恋しく思ひ出さずにはいられないと言う。そこには藤壺の変容の問題も絡むが、しかし、この須磨巻における心情表白を俟たずとも、物語の構想上藤壺に源氏への恋情がなかったとは考え難い。それは明白には語られなかったのである。

言い換えるならば、藤壺の源氏への恋情は、「おほかた」などの語によって語られ得るものであった。「おほかた」は、一

般的・全般的・普通の・表向きのなどの意を表すが、そこには常に対比される私的・内心・本心・個別・特別など固有の認識があり、むしろ表面的・一般的・全体的・世間的なるものを語るることによって、対比されるべき固有の本心・本音が浮かび上がってくる。「おほかた」を語ることによって逆に照射されるものを語る、それが藤壺の源氏への恋情を語る一つの方法ではなかったかと思うのである。直截に語ってしまえば、そこに藤壺の恋情は形象化されてしまう。明確には語らないことで、また源氏の恋情と響き合うことで形作られるものであったと思うのである。

注1 「源氏物語」の用例は「新編日本古典文学全集源氏物語」に拠る。以下「新日本古典文学大系」「新潮日本古典集成」

「日本古典全書」「日本古典文学大系」「源氏物語評釈」とともに「新全集」「新大系」「集成」「全書」「大系」「玉上評釈」と略称。

2 木船重昭「源氏物語の研究」「琴笛の音にきこえかよひ——藤壺像の修正——」(1969年9月大学堂書店)、大朝雄二「源氏物語の人物造型 藤壺」(「解釈と鑑賞」1971年5月)

3 吉沢義則「源氏随攷」(1942年5月晃文社)「源氏物語研究叢書」第9巻に拠る、玉上琢彌「源氏物語評釈」第4巻(1965年9月角川書店)も積極的にこの立場を取る。

4 「源氏の女君」(1959年2月三一書房、増補版1967

- 年6月塙書房) 増補版21頁。
- 5 『別冊国文学No.13源氏物語必携Ⅱ』(1982年2月) 作中人物論(藤壺中宮)
- 6 「なり」と「に」「にて」「には」「にやは」「にては」「にも」「にぞ」「にこそ」「にしも」を下接する形を含む。
- 7 『古今集』の「おほかたは」の解釈(『和歌文学研究』第47号1983年8月)
- 8 西本香子「紅葉賀巻「袖うちふりし心知りきや」試論―王権譚への転回―」(『文芸研究』第71号「明治大学文学部紀要」1994年2月)は、「袖振り」は上代と同じく呪術的な招魂の意とする。『新全集』『新大系』も招魂の所作と解するが、愛情の表出とする「集成」や吉見健夫氏(注11)などの見解に従った。
- 9 山崎良幸「あはれ」と「もののはあはれ」の研究(1986年11月風間書房)は、「あはれ」は「もともと相手の自分に寄せる愛情に対して、自分もまたそれに応じて同じように愛情を感じる」(138頁)こととする。
- 10 山崎良幸「日本語の文法機能に関する体系的研究」(1965年12月風間書房) 題助詞「は」。
- 11 「紅葉賀巻の藤壺―贈答歌の解釈から―」(『中古文学論叢』17、1996年12月)
- 12 「紅葉賀の試案と藤壺の宮」(『解釈』16―3、1970年3月)
- 13 「露も心のおかれましやは―藤壺の宮の自照から自立へ―」(『平安文学研究』第47輯1971年11月)
- 14 和田明美「古代日本語の助動詞の研究―「む」の系統を中心とする―」(1994年12月風間書房) 1911~192
- 15 「葛藤する歌―藤壺の独詠歌について―」(『源氏研究』第9号2004年4月)
- 16 『新大系』は青表紙大島本の「おほふかたの」を本文とするが、注で「青表紙本他本多く、初句「おほかたの」と述べ、「おほかたの」の解釈を示す。
- 17 山崎良幸「源氏物語の語義の研究」(1978年6月風間書房) 200~201頁における「愛し」の意義参照。
- 18 『岩波古語辞典』では語源を「つき合わせて一緒にする意のカテ(合・糅)と同根か」とし、白石佳和「語りと歌をつなぐ「かつは」―古今集から源氏物語へ―」(『和歌文学研究』第81号2000年8月)では、「かつ」「かつは」は「本来一緒に起こらないはずの動作が起こるとする矛盾を認識する」語であるというが、「かつ」を語根とする「かつ」「かつは」「かつがつ」は、数ある中から何といってもまずはと、一つのを特立する意であると考える。
- 19 「光源氏・藤壺の宮の贈答歌―賢木の巻におけるその展開―」(『平安文学研究』第48輯1972年6月)
- (やまざき かずこ・博士後期課程二年)